

「水師營の会見」(全9番)

作詞 佐々木 信綱

- | | |
|--|---|
| 一、旅順開城約成りて
敵の將軍ステッセル
乃木大将と会見の
所はいづこ水師營 | 二、庭に一本棗(なつめ)の木
弾丸あとも著じるく
崩れ残れる民屋に
今ぞ相見る二將軍 |
| 三、乃木大将はおごそかに
みめぐみ深き大君の
大みことのり伝ふれば
彼かしくみて謝しまつる | 四、昨日の敵は今日の友
語る言葉も打ちとけて
われはたたへつ彼の防備
かれはたたへつ我が武勇 |



- 日露戦争で一番苦戦をした戦場 旅順
 - ▽延べ13万の将兵が 攻め落とすのに137日
半分近い 5万9304人の死傷者
 - ▽陸軍の全戦死者 6万447人のうち
1万9304人が 旅順で死んでいる
 - ▽内地で「旅順に向かうものは士気消沈すること
尚屠所の羊のごとく」と囁かれ「死の戦場」と

- 第3軍司令官として指揮をとった乃木希典
 - ▽陸軍には 西郷隆盛以来 134人の陸軍大将
乃木は 戦後も長く 国民の記憶に残る大将
 - ▽「乃木人気」は 唱歌「水師營の会見」に
 - ▽ステッセル將軍に サーベルの着用を許す
 - ▽米映画技師の 会見場面撮影希望を 許さず
従軍記者たちの たったの願いで
友人として並んだ記念写真 それも1枚だけ



旅順陥落後水師營ニ於テ一千九百零五年一月五日

乃木 希典(のぎ・まけ)の

嘉永2(1849)～大正1(1912)長府藩江戸屋敷で生まれる。陸軍大将。叔父玉木文之進の門に入り、慶応2年山県有朋らに従って幕兵と戦う。明治4年陸軍少佐となり西南戦争に歩兵第14連隊長心得として出征、西郷軍に連隊旗を奪われる。19年ドイツ留学。日清戦争では歩兵第1旅団長として旅順攻略。29年第3代台湾総督。第11師団長を経て日露戦争で第3軍司令官、旅順攻略を指揮。40年学習院長。明治天皇大喪の日、静子夫人と殉死

西郷 隆盛(さいこう・たかもり)

文政4(1827)～明治10(1877)薩摩藩出身。陸軍大将。通称吉之助、号を南州。維新の三傑の一人。慶応4年東征軍参謀となり江戸城を無血開城させる。明治4年参議として政府首班に立つ。6年征韓論を唱えて容れられず下野、鹿児島帰郷。10年西南戦争を起こし、城山で自決。逆賊とされたが、22年正三位を追贈

佐々木 信綱(ささき・のぶな)

明治5(1872)～昭和38(1963)三重県生まれ。歌人・国文学者。明治38年東大講師。万葉集研究に業績を残し式典歌、軍歌、唱歌を多く作詞。昭和12年文化勲章

…… 乃木と対比された山下奉文 ……

山下軍司令官率いる第25軍は昭和17年2月15日、シンガポールを攻略。山下は英軍総司令官パーシバル中将与との会見で「イエスカノーか」と、机をドンと叩いて無条件降伏を迫った。これが戦後の戦犯裁判で英国の恨みを買ったとされたが、今日出海が山下から聞いた話では、パーシバルが愚図愚図している。通訳に「どうなんだ」と聞くと、通訳が「イエスカノーか」。通訳の言葉が山下の言葉になってしまった。

● 乃木をめぐる「無能論争」

▽ 司馬遼太郎「殉死」

(I 要塞 II 腹を切ること 昭和42年別冊文芸春秋)

乃木の 指揮官・軍事能力に 疑問を投げた

「乃木将軍は無能ではない」

今村均元陸軍大将は反論した。「旅順の苦戦は参謀本部に原因がある。一挙に攻めろという参謀本部の要求に沿って第三軍参謀長が作戦計画を立てている以上、軍司令官の乃木としては容易に訂正しにくかったろう。むしろあれだけの犠牲を出しながら、最後まで将兵の気持ちを一つにまとめて戦い通せたのは、乃木の人徳である。戦略、戦術に長ずることは勿論軍司令官に必須の条件である。が、この部下の衆心一致を得る点も、軍司令官の能力を評価する場合欠かしてはならぬことと私は理解しているのである」 (昭和42年7月14日読売新聞文化欄)

● 陸軍は、旅順をどう分析し、記録として残したのか

▽ 参謀本部編「明治卅七八年日露戦史」(天3年 全10巻)

司馬さん「これほど不思議な歴史書はちょっと見当らない。実に克明に詳細に書いてあるのに、煙でも掴むみたいに実体がよくわからない」

▽ 編纂作業と並行して 論功行賞の作業

▽ 参謀長・伊地知幸介(いぢ・こうすけ 麟趾)少将の

「無能無策で無用に兵を殺した」が

陸軍部内の 定評だったが…

ステッセル(Anatolii Stessel)

1848～1915 日露戦争の旅順要塞司令官。戦後軍法会議で死刑判決を受け、禁固10年に減刑。晩年は行商をしていた

山下 奉文(やました・ともゆき)

明治18(1885)～昭和21(1946)高知県出身。陸軍大将。昭和16年第25軍司令官となりシンガポールを攻略。第1方面軍司令官、19年第14方面軍司令官。比島戦を指揮したが、戦後マニラで刑死

今 日出海(こん・ひでみ)

明治36(1903)～昭和59(1984)函館生まれ。作家。今東光の弟。明大教授。比島戦に報道班員として従軍し「山中放浪」で敗走を描く。戦後、昭和20年文部省芸術課長。25年「天皇の帽子」で直木賞。43年初代文化庁長官。53年文化功労者

今村 均(いまむら・ひとし)

明治19(1886)～昭和43(1968)宮城県生まれ。陸軍大将。昭和16年第16軍司令官としてジャワ作戦を指揮。17年第8方面軍司令官となりガダルカナル島撤退に努力。戦後、部下の責任を問われ禁固10年。部下のいるマヌス島服役を希望、28年帰国。釈放後は自宅の庭に3畳の小屋を建て、そこで寄居し謹慎生活を送る

「失敗なき戦史」が出来た

乃木は日清戦争で男爵になり、日露戦争では子爵を通り越し、伯爵になった。伊地知は戦争が終わった時中将になっていて、「中将以上」という爵位の規定に従って男爵になったが、「伊地知の男爵はダダ」とすれば、乃木にも傷がついて伯爵に出来ない。論功行賞で手柄があるとしたのに、陸軍の公の戦史で否定するようなことは書けなかった。

▽貴重な戦史

谷寿夫(たに・ひさお)の「機密日露戦史」(昭和41年印刷)

「機密日露戦史」

谷中將が陸大教官の大正14年、学生に講義したガリ版刷り12冊の講義録を纏めたもの。未公開の軍事秘密資料を使い、関係者の生々しい証言も集めている。戦前は「極秘」の扱いで、陸軍でも限られた人しか閲覧できなかった。

谷は第6師団長時代の南京虐殺事件の責任を問われ、戦後の現地裁判で死刑になった。

●薩長のバランス感覚を優先させた人事

日露戦争の軍司令官

満州軍 総司令官	大山 巖 (薩摩)
総参謀長	児玉 源太郎 (長州)
第1軍 軍司令官	黒木 為楨 (薩摩)
第2軍 軍司令官	奥 保鞏 (小倉)
第3軍 軍司令官	乃木 希典 (長州)
参謀長	伊地知 幸介 (薩摩)
第4軍 軍司令官	野津 道貫 (薩摩)

▽「長州の陸軍」と言われながら 第3軍編成まで
出征軍の軍司令官に 長州がいない

▽長州閥総帥 陸軍の大御所 山県有朋は

「第3軍司令官は是非とも長州から」と 乃木に

▽軍司令官が長州なら 参謀長は薩摩から

伊地知は 参謀本部第1部長を務め

砲兵の専門家 夫人は大山総司令官の姪

▽要塞旅順を攻めるには

築城工事の専門家を 配置すべきだったが...

●旅順攻略は、陸軍の計画にはなかった

▽児玉の作戦計画は 満州平野で 主力決戦を挑む

「竹矢来でも旅順の前面に張り巡らして、

要塞内から我が軍の背後へ出てこれないようにすれば済むんじゃないか」

▽海軍も 旅順のロシア艦隊は

狭い港の出入口に ボロ船を沈めて塞ぎ

出られないようにすればと 思っていた

大山 巖(おやま・いわ)

天保13(1842)～大正5(1916) 薩摩藩出身。陸軍大将・元帥。元老。明治10年陸軍卿。14年参議兼任。17年欧州各国の兵制を視察し18年陸相。日清戦争では第2軍司令官。参謀総長を経て、日露戦争で満州軍総司令官。大正3年から内大臣

児玉 源太郎(こがま・げんたろう)

嘉永5(1852)～明治39(1906) 周防徳山藩出身。陸軍大将。明治31年台湾総督。33年第4次伊藤内閣陸相となり、桂内閣に留任。36年参謀次長。日露戦争では満州軍総参謀長として陸軍の作戦を指導した。39年参謀総長、在任中に急死

黒木 為楨(くろき・ためと)

弘化1(1844)～大正12(1923) 薩摩藩出身。陸軍大将。日清戦争で第6師団長。日露戦争では第1軍司令官、鴨緑江から奉天に連戦した。大正5年枢密顧問官

奥 保鞏(おく・やすた)

弘化3(1846)～昭和5(1930) 小倉藩出身。陸軍大将・元帥。日清戦争で第5師団長。日露戦争で第2軍司令官。明治39年参謀総長となり、亡くなるまで軍職に

野津 道貫(のづ・みちつら)

天保12(1841)～明治41(1908) 薩摩藩出身。陸軍大将・元帥。日清戦争で第5師団長、第1軍司令官。近衛師団長、教育総監を経て日露戦争では第4軍司令官

山県 有朋(やまがた・ありとも)

天保9(1838)～大正11(1922) 長州藩出身。陸軍大将・元帥。松下村塾に学び、奇兵隊軍監。明治2年欧米を視察、帰国後、陸軍大輔を経て6年陸軍卿となり軍制、徴兵制を確立。参謀本部長、内務卿を歴任。18年伊藤内閣内相となり、陸軍と内

▽ところが 3回の閉塞作戦は ことごとく失敗
そこへ「バルチック艦隊が

極東に派遣される」の 海外情報

▽「陸上から攻めて旅順艦隊を追い出してほしい」
海軍の要請で 5月2日 第3軍を編成

●「乃木は旅順を知っている」

▽日清戦争で 旅順を1日で 落としていた

▽だが 10年前の旅順では なかった

▽港を巻き込むように 標高2百~4百㍎の丘陵

この天険に 20万樽のセメントを使って

砲台 陣地をコンクリートで固めた 永久要塞

▽乃木が 大本営から渡されたのは

10年も前の 古い2万分の1地図

陣地も「臨時築城程度」と なっていた

▽守備兵力も せいぜい 1万5千

大砲200門と 踏んでいたのに

実際は 4万2千のロシア軍が

大砲646門 57挺の機関銃に守られ

8か月分の食糧を 蓄えていた

▽第3軍は 3個師団(第9 第11) 約6万5千

大砲も 攻城用146門 野砲108門

▽「攻者3倍の原則」というのに

旅順の苦戦は 誤った敵情判断にあった

— 「蟻地獄」のような堡壘 —

五角形か台形の岩のコンクリートは、15㍎砲の砲弾が当たっても大丈夫なように厚くされた。その周りに、深さ7~9㍎、幅6~12㍎のほとんど垂直の壕を巡らし、日本兵が入っても、どの方角からも射撃できるトーチカを備えていた。熾烈な十字砲火を突破、堡壘内になだれ込んだ部隊がたちまち殲滅され、辛うじて帰ってきた兵隊の報告も要領を得ない。

第一線将兵の間に「化物屋敷」の噂が広がり、兵士に恐怖心を抱かせ、士気の低下を招いた。

務官僚の支配権を握る。22年首相。枢密院議長を経て日清戦争で第1軍司令官。31年再び首相となり軍部大臣現役武官制を実施。日露戦争では参謀総長。元老として長州閥を率い、陸軍、政界に君臨

— 「永久要塞旅順」の情報不足 —

参謀本部は36年冬、石坂善次郎大尉を中国人労務者に変装させ旅順に潜入させたが、ロシア軍の警戒は厳重だった。旅順に入る列車は全て窓のブラインドを下ろさせ、どんな地形か、それさえ覗かせようとしない。情報洩れを恐れて、築城工事の中国人労務者を酒に酔わせて皆殺しにした、という話さえある。

特定部隊が長期間、同じ堡壘に配置されていると、下級兵士にも詳細がわかってしまい、出入りの洗濯屋、商人に喋ってしまうと、頻繁に配置換えをした。

…… 開戦直後に攻めていたら? ……………

永久要塞に強化されたのは開戦後。築城工事は明治33年から始まっていたが商業港大連の整備を急いだため、旅順築城に投入されたのは大連港の工事費の18%足らずだったという。

陸上防衛隊長・コンドラチェンコ少将(要撃隊)が愕然としたのは、大砲が海からの攻撃に備えほとんどが海上正面を向いていること。陸上向けは200門しかなく兵力も2万4千。毎日1万人前後の労務者を動員して20㍎の陸上戦線の要塞強化を急ぎ、兵力、火力を倍増した。

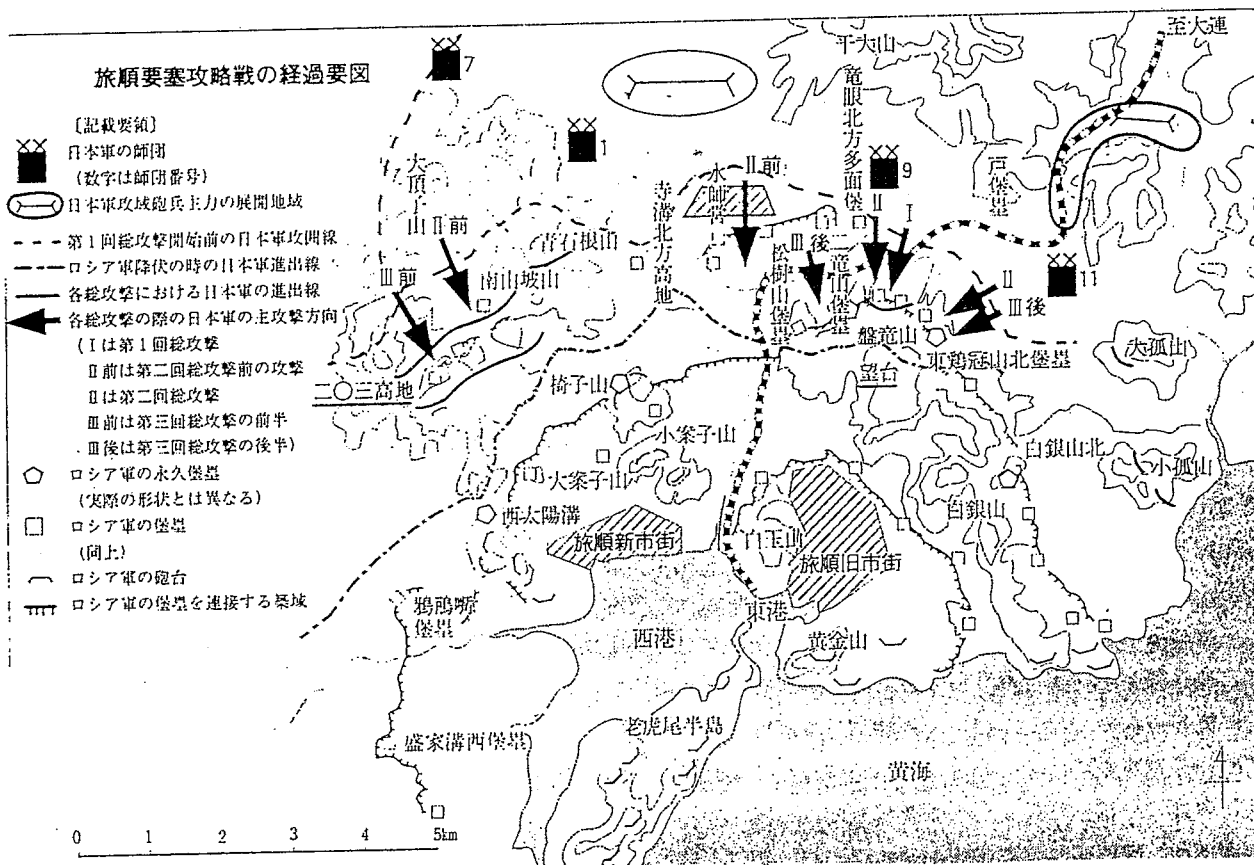
— 旅順と水師營 —

渤海(ぼっかい)は8世紀から10世紀にかけて満州、沿海州に栄えた国。使者が海路旅立つ時、必ずここから出たので「旅の順路」ということで名付けられた。清朝の時代、旅順が北洋艦隊軍港となり、海軍の兵營が作られ、水師提督がいた。

●第1回総攻撃は8月19日に始まった

▽陸軍は 2、3日で 落とす積もりだった

陸軍省の庭に「陥落発表」に備え 記者用テント



▽新聞は「旅順陥落」の日付なしの号外を印刷
 ▽東京 横浜で「陥落祝賀会」入場券が飛ぶように

●第3軍の作戦計画は、二竜山—東鷄冠山の要塞正面から中核陣地の望台(もうだい)を強行突破

▽参謀本部は 旅順を 1日でも早く落とし
 第3軍を 満州平野の決戦に 持って行く考え
 ▽それには これが 旅順市内への最短距離

大砲の配置も簡単 素早く 威力を発揮できる
 ▽二〇三高地(竊203)攻撃は 考えていなかった
 前進基地が必要 大砲展開にも 時間がかかる

▽第3軍は 自信満々だった
 「要塞正面からの攻撃は、
 少々犠牲が出ててもこの方が早い」

●「人間とコンクリートの戦い」だった

▽254門の大砲が 2日間で12万発
 3個師団5万7百の将兵が 一齐に突撃
 コンクリート陣地は びくともしなかった
 ▽緩やかな斜面には 体を隠す 岩も木もない
 上から 丸見えのところを突撃
 集中砲火で 死傷者1万5千8百 死傷率31%

凄惨な戦場

双眼鏡を覗いていて「あんなことじゃいかん。草に隠れているようで、戦に勝てるか」怒鳴った乃木がしばらくして黙り込んだ。草の中に隠れているように見えたのは、機関銃に薙ぎ倒され、動かなくなった死体の山。奪った敵陣地はわずかに一つ。ロシア軍の反撃が凄いのので、慌てて周りの死体を土嚢代わりに積み上げ体を隠した。真夏だから、翌日には死臭が漂い出し3日目にはウジ虫。臭いだけでも何とかしようと、あるったけの線香を焚いたという。

秋山 真之(あきま・まゆき)

慶応4(1868)~大正7(1918)伊予松山藩出身。海軍中将。明治30年6月米国留学。英国駐在を経て35年海大初代戦術教官となり、36年10月連合艦隊作戦参謀。丁字戦法で日本海海戦でバルチック艦隊を破る。第1艦隊参謀長。大正3年軍務局長。秋山好古陸軍大將は兄

●なぜ弱点を見付け、そこから攻めなかったのか

▽連合艦隊作戦参謀 秋山真之中佐は

いち早く「二〇三高地が弱点」と見抜いた

▽西の地区では一番高い山

露出陣地で 大砲も 剥出しになっている

▽奪取は簡単だし 港を見下ろせるに違いない

大砲観測所を置けば

旅順を落とさなくても 艦隊を撃滅できる

▽秋山は 第3軍に派遣の海軍参謀に 28通の手紙

悲鳴をあげるように「二〇三高地を取れ」

▽伊地知参謀長は「陸軍には陸軍のやり方がある」

旅順を落として 初めて 陸軍の手柄になる

二〇三高地なんか 寄り道していられるか

▽参謀次長・長岡外史少将も

第3軍を 二〇三高地へ向けようとするが…

……「機密日露戦史」から ……

第3軍のある旅団長は、伊地知を「老朽変則の人物」として、長岡に「即刻代えてほしい」と訴えている。長岡自身も第1回総攻撃が失敗に終わった直後、満州軍高級参謀・井口省吾少将宛てに第3軍に対する不満の手紙を出している。

「軍司令部及び師団司令部は殆ど砲弾の達せざる遠距離にありて、戦前は素より、攻撃中の偵察も第一線の歩兵青年士官に任せるにあらざるか。驚くべき不始末の偵察にして、若しこの事世間に漏れしなれば、如何に一般の憤激を引き起こすべきか。敵を見ることなく、一万有余の猛将勇士を戦死せしめ、とありては軍司令部の責任を尽したると云い得べきか」

▽第一線も 参謀本部も

「こんな参謀長じゃダメだ」と思っていたのに
誰が 猫の首に鈴をつけるか (大山総司令官の観感)

●「旅順を落としたのは、28 号榴弾砲」

▽ヒントを 長岡参謀次長に与えたのは

大砲の技術開発が専門の 有坂成章少将

「厚さ1 呎30 号の旅順のコンクリートを割る

には、最低でも22 号の口径の大砲が必要だ。

それを持って行けば旅順は落ちる」

長岡 外史(ながおか・がいし)

安政5(1858)～昭和8(1933) 長州藩出身。陸軍中将。日露戦争で参謀本部次長を務め、軍務局長、第13・16師団長歴任。大正13年衆院議員。13師団長(副)の時、部下にオーストラリアのレルヒ少佐から、日本で初めてスキーを学ばせる。草創期の航空界発展にも貢献した

井口 省吾(いぐち・しやうご)

安政2(1855)～大正14(1925) 静岡県生まれ。陸軍大将。陸大教官を経て日露開戦時の参謀本部総務部長。明治37年6月満州軍高級参謀。のち軍事参議官

—— 小島直記「日本策士伝」から ——

陸軍は明治16年暮れ、大部隊指揮を实地に学ぶため、陸軍卿・大山巖を団長とする15人の視察団を独仏両国に派遣した。野津道貫少将、川上操六大佐、桂太郎大佐ら錚々たるメンバーの中には伊地知砲兵中尉も。一行の船には留学生・郷誠之助も乗っていて、留学経験のある伊地知が先輩面をして、「ネクタイが曲がっているぞ、スリッパで船内を歩くやつがあるか」口うるさく注意するので、郷が痲癢を起こし、「あの野郎、インド洋に叩き込んでやろうか」

一頃は、参謀総長になった川上操六門下の「四天王」とまで期待された伊地知だったが、知ったかぶり、自負心が強く他人の意見を容れようとしない偏屈さが、人間的成長を止めたのではないか。

川上 操六(かわかみ・そうく)

嘉永1(1848)～明治32(1899) 薩摩藩出身。陸軍大将。明治16年西欧列強の兵制を視察。近衛第2旅団長を経て20年再びドイツに渡り陸軍の兵制を仏式から独式に転換。22年参謀次長、31年総長

▽陸軍には そんな大口徑砲はない

有坂は「東京湾観音崎砲台の28杼榴弾砲」

▽バルチック艦隊に備えて

対馬へ持って行く話が 出ていて

「いっそ、それを旅順に持って行ったらどうか」

▽伊地知参謀長の返事は「送ルニ及バズ」

大砲据え付けの コンクリートが乾くのに

1か月も2か月もかかる 役に立たない

▽長岡は 伊地知の性格を 知っていたから

返事も待たずに 先に 6門を送っていた

▽10月1日砲撃を開始 旅順市内は震え上がった

さらに12門送られ 心理的にも 参っていく

●第3軍も9月20日、一度は二〇三高地を攻撃

▽ただ 攻撃重点は あくまでも要塞正面

二〇三高地に向けたのは 後備兵2個大隊

▽ロシア軍も わずか4個中隊だったが

コンドラチェンコ少将は 天啓のように

二〇三高地の 戦略的価値に 気付き

惜し気もなく 増援部隊を投入

「最後の兵となるまで死守せよ」と厳命

▽日本軍を撃退すると 本格的築城工事に

●第3回総攻撃は、第7師団増援を得て11月26日

▽相変わらず 望台一帯の高地 攻略を目指して

▽夜には 3千人の決死隊「白樺隊」

指揮官の中村覚少将は 悲壮な訓示をした

「生きて帰ろうと思うな。

退却する者あらば、これを斬れ」

▽松樹山砲台に 白刃を振るって 斬り込んだが

たちまち サーチライトに照らされ つるべ撃ち

死傷者2千3百 死傷率 実に76%

●乃木軍司令官は27日朝、二〇三高地攻略を命令

▽何か言いかけた 伊地知参謀長を押さえ

乃木の口から出た 初めての命令だった

▽児玉総参謀長は

大山総司令官署名の一札を懐に 旅順へ

「満州軍総司令官の名を以て、

第3軍に命令することを貴官に任す」

桂 太郎(かつら・たろう)

弘化4(1847)～大正2(1913) 長州藩出身。陸軍大将。元老。明治3年ドイツに留学。19年陸軍次官となり軍制改革。日清戦争で第3師団長。29年台湾総督。31年第3次伊藤内閣陸相。大隈・山県・伊藤内閣に留任。34年首相。日英同盟を締結し日露戦争を指導した。第2次内閣で韓国併合。内大臣兼侍従長を経て大正1年第3次内閣を組織したが、憲政擁護運動の高まりの前に、わずか2か月で辞職

郷 誠之助(ごう・せいすけ)

慶応1(1865)～昭和17(1942) 岐阜県生まれ。大蔵次官郷純造の次男。明治16年東大入学。翌年から7年間独ハイデルベルク大学留学。44年貴族院議員。東京株式取引所理事長、日本工業倶楽部専務理事。昭和5年日本商工会議所会頭となり、財界のリーダー的存在に

有坂 成章(ありさか・なりあきら)

嘉永5(1852)～大正4(1915) 周防岩国藩出身。陸軍中将。明治15年砲兵大尉となり、独クルップ社で兵器の調査・研究を行なう。36年陸軍技術審査部長。この間野砲・山砲の改良・設計に努めた。「有坂砲」と呼ばれる31年式速射砲を発明、日露戦争で威力を発揮した

中村 覚(なかむら・さとる)

安政1(1854)～大正14(1925) 滋賀県生まれ。陸軍大将。台湾軍参謀長を経て日露戦争で歩兵第2旅団長。旅順攻略戦で白樺隊を指揮した。侍従武官長、東京衛戍総督を歴任、大正3年関東都督

「お墨付き」は使われたのか？

児玉・乃木会談は二人だけで行なわれ、共に戦後も口を噤んでいるので、真相はわからない。ただ、児玉に同行

●児玉は総司令官代理として、直ちに行動に移った
▽二〇三高地では奪ったかと思うとすぐ奪回
凄惨な争奪戦が展開されていた

▽児玉は重砲陣地の大移動を命令した
高崎山(高崎の兵隊19連隊が占領)に重砲を集め
一斉砲撃で敵の砲台を制圧しようと

▽第3軍参謀が「簡単に移動できない」と反論
児玉は「命令!」と怒鳴って

24時間以内の陣地転換を实行させた

▽二〇三高地は12月6日朝ついに落ちた
この戦闘だけで死傷者1万7千

▽素直な双子山は凸凹だらけの山に
頂上から麓まで両軍の死体が折り重なり
赤い絨毯を敷き詰めたようだった

●児玉は聞いた「旅順港は見下ろせるか」

▽港内の軍艦は一望のもとだった

18門の28杼榴弾砲が戦艦4隻を沈め
逃れようとした1隻も日本艦隊に撃沈された

▽15日コンドラチェンコ少将が戦死すると
ロシア軍の士気は急速に衰え

38年1月1日午後望台も陥落

ステッセルは夜降伏を申し入れた

▽伊地知は児玉に嘯み付いたという

「弾丸もくれないで、ただ落とせ落とせと
云うのなら、わしでも出来る」

▽多大な犠牲は伊地知の無能無策にあっても
それを黙認した乃木にも大きな責任があった

●第3軍は39年1月14日、東京に凱旋した

▽乃木は明治天皇に戦闘経過を報告した

「臣、希典 明治三十七年五月、第三軍司令官
タルノ大命ヲ拝シ、旅順攻略ニ任ジ…」

▽復命書を読み上げていくうちに

激しい嗚咽で何度も何度も声が途切れた

▽旅順で苦戦しているとき乃木の家には

「人殺し」「腹を切れ」と石が投げられた

乃木の許には2400通もの非難の手紙

▽他の将軍の復命は型通りの戦勝報告

乃木のそれは自らに鞭打つような自己批判

した満州軍参謀・田中国重少佐は「乃木將軍は涙を流して、致し方なし、任す同意せられたり」

情理を尽くしての説得で、命令書は使わなかったように思える。

田中国重(たか・くしげ)

明治2(1869)~昭和16(1941) 鹿児島県生まれ。陸軍大将。満州軍参謀、駐米・駐英武官、第15師団長、台湾軍司令官歴任

…… 朝日新聞号外(38年1月2日付) ……

「旅順陥落 一月一日夜着電 旅順攻
囲軍報告 本日午後九時関東要塞地
区司令官ステッセル將軍より開城に
関する書面を受領せり」

一 乃木の復命書

…然ルニ斯克ノ如キ忠勇ノ将卒ヲ以
テシテ、旅順ノ攻城ニハ半歳ヲ要シ、
多大ノ犠牲ヲ供シ、奉天付近ノ会戦
ニハ攻撃力ノ欠乏因リ退路遮断ノ任
務ヲ全ウスルニ至ラズ、又敵騎兵集
団ノ我ガ側背ニ行動スルヲ當リ、之
ヲ撃摧スルノ好機ヲ得ザリシハ臣ガ
終生ノ遺憾ニシテ、恐懼措ク能ハザ
ル所ナリ (讀では太字部分が伏せ字で表された)

王師百万征-驕虜-

野戦攻城屍作、山

愧我何顔看-父老-

凱歌今日幾人還

王師百万驕虜(きょうりょ)ヲ征ス

野戦攻城屍(しかばね)山ヲナス

愧(は)ズ我何ノ顔(かほ)ニ

アツテカ父老ニ看(まは)シ

凱歌今日幾人(いくたり)カ還ル

●「謹厳無比の乃木」はドイツ留学から帰国後(明治21年)

▽それまでは「放蕩無頼の乃木」

夜な夜な 料亭を飲み歩き「乃木の豪遊」

▽乃木は 西南戦争で 軍旗を奪われている

当時は 問題になっておらず

「自責の念が酒に走らせた」は 後からつけた話

…… 軍旗問題 ……

乃木の歩兵第14連隊は、明治10年2月22日、熊本城救援に向かう途中で田原坂で薩摩軍に包囲され、連隊旗手河原林勇太少尉が戦死、軍旗を奪われた。城を包囲した薩摩軍が、丘の上に旗を立てて囃し立てたため乃木は進退伺いを出した。しかし「旗手戦死、窮迫の際、万やむを得ざる場合につき」と一切お咎めなし。乃木も少佐から中佐に進級している。

4か月前、熊本・神風連の乱でも歩兵第13連隊長・与知倉実中佐が官舎で襲撃され、軍旗を置き去りにしたまま脱出、軍旗を奪われたが、問題になっていない。軍旗は明治7年1月、近衛歩兵連隊が創設された時に天皇から親授されるようになったが、軍旗が団結の象徴となり、天皇の分身として神聖視されるのは、後のこと。

▽酒に 紛らさなければ ならないほど

乃木を苦しめたのは 別なことだったのでは…

●乃木は明治4年陸軍に入り、22歳でいきなり少佐

▽薩摩の黒田清隆の 推薦だった

…… 「帰薩」と呼ばれた乃木 ……

乃木が結核で療養中の従兄・御堀耕助を訪ねた時、見舞いに来ていたのが黒田中将だった。当時大將は西郷一人、中将も黒田、山県だけだったから陸軍切つての実力者。御堀から「この青年を頼む」と、乃木を託された黒田が約束を守ったものだった。

乃木の夫人静子は薩摩藩士の娘。乃木は明治11年、東京の歩兵第1連隊長になったが放蕩無頼の生活はやまない。心配した母寿子が「嫁でもとれば」と、相談した乃木の副官が薩摩出身で、知人の娘を紹介した。当時乃木の上官だっ

—— 田中義一の語る乃木 ——

乃木將軍は、若い頃は陸軍切つてのハイカラであった。紬の揃いに角帯をゾロリと締め、あれでも軍人かと云われたものだ。それがドイツから帰ると恐ろしく蛮カラになって、内でも外でも軍服で押し通す変わり方だ。それが余りにひどいのでワケを聞いたが、「感ずるところあり」と云うだけで、どうしても云わなかった。

田中 義一(たなか・ぎいち)

元治1(1864)～昭和4(1929) 長州藩出身。陸軍大將。日露戦争で満州軍参謀。大正4年参謀次長、シベリア出兵を推進した。7年原内閣・12年山本内閣陸相。14年政友会総裁となり、昭和2年首相に就任。張作霖爆殺事件で辞職

—— 乃木の生い立ち ——

代々、長府藩江戸詰の医者の家柄だったが、父希次が医者が嫌で武芸に熱中、武士として仕えた。乃木は体も弱く、学問で身を立てたいと思っても父が許さない。乃木は15歳の時、家出同然に家を出ると、萩で儒学を教えていた叔父・玉木文之進の内弟子になった。

玉木は吉田松陰の叔父に当たり、松下村塾で松陰を幼少より厳しく育てたという。乃木の弟正誼は、やがて玉木の養子になるから、乃木は長州では玉木・松陰に連なる筋目の人だった。

玉木 文之進(たまき・ぶんしん)

文化7(1810)～明治9(1876) 長州藩士。天保13年松下村塾を創設し藩校明倫館都講(塾頭)、代官、郡奉行など歴任。明治2年勇退、松下村塾を再興したが、萩の乱に門下生が参加した責任をとり自刃

た三浦梧楼中将(長州)が回顧録に書いている。

ある時薩長の間で論争になり、「腕力でやれ」と怒鳴る者がいる。見ると乃木なので「何だ帰薩、混血児を作りおって」と言ってやった。

「帰薩」とは、薩摩人を女房にして薩摩に帰化したという意味で、「混血児」は日露戦争で戦死する長男勝典のこと。

吉田 松蔭(よしだ・しょういん)

天保1(1830)～安政6(1859) 長州藩士。通称寅次郎。安政1年ペリー再来の時に密航を企てて捕まり、萩に幽閉される。4年松下村塾を開き、維新の指導者を育成したが、「安政の大獄」で江戸で刑死

黒田 清隆(くろだ・きよたか)

天保11(1840)～明治33(1900) 薩摩藩出身。五稜郭の戦いで戦功を立て中将。兵部大丞、開拓次官を経て明治7年参議兼開拓長官となり、北海道開拓に当たる。21年第2代首相に就任したが、条約改正交渉に失敗し辞任。28年枢密院議長

御堀 耕助(みほり・こうすけ)

天保12(1841)～明治4(1871) 長州藩士。慶応1年御楯隊総督となり、幕府の長征軍と戦う。3年長州藩参政に就任し王政復古に尽力。明治2年渡欧の途中で結核を発病し、帰国した

三浦 梧楼(みうら・ごろう)

弘化3(1846)～大正15(1926) 長州藩出身。陸軍中将。号を観樹。東京・熊本鎮台長官を歴任、明治21年学習院長。28年韓国公使となり、閔妃(びんひ)暗殺事件を起こし投獄されたが、翌年免訴。43年枢密顧問官。晩年は政界の黒幕として活動

前原 一誠(まえはら・いっせい)

天保5(1834)～明治9(1876) 長州藩士。戊辰戦争で北越参謀を務め、明治2年参議・兵部大輔となったが、新政府内で意見が合わず、翌年病気を理由に帰郷。萩の乱で挙兵し、捕われて斬首になった

乃木の福原宛て書簡

希典、去年此ノ職(懸帳)ヲ奉ズルヨリ、居職寝食ノ間ト雖モ、意ヲ此騒乱ノ因起スル処ニ注ガザルナク、終(つひ)ニ骨

●乃木が本来の長州閥に組み入れられるのは明治7年に山県陸軍卿の伝令使になってから

▽8年暮れ 歩兵第14連隊長心得(楯)

西国で不穏な情勢が続いている時

西郷隆盛は征韓論を主張して容れられず、明治6年鹿児島に帰っていた。政府が9年3月、「廃刀令」を定め、大礼服着用者・軍人・警官以外の帯刀を禁ずると、士族の不満は高まった。参議前原一誠も明治3年萩に帰り、不平士族の頭領に祭り上げられていた。乃木の弟正誼は前原の参謀であり、玉木も支持者だった。

▽山県には 乃木に 情報収集させる狙い

▽乃木は 正誼の執拗な誘いを 断っただけでなく

弟から得た情報を 逐一 山県に報告している

▽熊本「神風連の乱」(明治9年10月24日)に続き

福岡県甘木の「秋月の乱」(10月26日)

前原も挙兵し「萩の乱」(10月28日)

正誼は戦死し 玉木も割腹自殺した

▽乃木は 長州の先輩

福原和勝大佐(西郷隆盛)との間に 往復書簡

「骨肉の情を絶って、己れを知る者、自分を

取り立ててくれた山県に報いようとしたのだ」

▽乃木にとって 弟と恩師の死は 心のオりに

●陸軍はフランス式からドイツ式に切り換え

▽普仏戦争(1870年)の プロシヤ勝利から

陸大戦術教官に メッケル少佐を招き

乃木のドイツ留学(明治19年)も その一環

▽乃木は 1年半の留学を終え「精神家乃木」に

「将校は家庭でも制服着用を」と 意見書

▽ドイツ軍人に 武人の理想像

ひたすら努力する姿が 乃木崇拜者を生み
窮屈なほど 厳格だったため 乃木批判も

●異常な経歴 将軍になって3度も休職

▽その都度 栃木県那須野の別邸で 晴耕雨読

稗飯を食べ「質素で時世に恬淡」のイメージ

▽上京した時は 山県など有力者を 精力的に訪問

3度目(2年8ヵ月)を除いては 10ヵ月ほどで復職

▽最初の休職は 明治25年 名古屋の旅団長の時

上司の第3師団長に 桂太郎(乃木が犠牲のとき大尉)

濃尾大地震に桂の決断

明治24年10月28日、愛知県北西部から岐阜県
にかけ、家屋倒壊14万戸、死者7300、負傷者1万
7000を出した。通信が途絶し警察、消防も手の
出しようがない。軍隊の出動は、当時も知事の
要請が必要だったが、桂は「一刻の遅れが被害
を大きくする」と、独断、師団に出動を命じた。
工兵隊や衛生隊が復旧、医療に活躍、師団の放
出食糧が市民を飢えから救った。

桂は独断出兵の責任をとり、辞表を提出した
が、明治天皇は桂の機敏な処置を大変喜ばれ、
却下された。桂は「軍服を着た太鼓持ち」とか、
誰かれ構わずニコニコ、ポンと肩を叩くので、
「ニコポン宰相」とか言われた人だが、ただ調
子がいいだけの男でなかったことがわかる。

●2度目の休職は、台湾総督の明治31年1月

▽独立運動 土匪の反乱

軍人と役人の反目 悪徳業者の横行

行政能力のない乃木には 手に余った

▽乃木の不幸は 旅順でも そうだったが

良きパートナーに 恵まれないことだった

▽後任総督の児玉は「民生優先」を打ち出し

民政長官に 後藤新平を据えた

▽後藤は まず 官吏1700人を整理

砂糖を 台湾の代表産業に育て

現地人の授産対策も 次々と 実行した

▽台湾統治の土台は 児玉・後藤時代に固まった

肉の親ヲ絶テ、己レヲ知ル者ノ為ニ報
ズルアラントスルハ…

メッケル(Klemens Wilhelm Meckel)

1842~1906 ドイツ陸軍少将。明治18年
少佐の時、陸軍に招かれ来日し、軍制近
代化を指導した。21年帰国

友人への手紙で嘆いている

「官吏が台湾に来るのは贅沢をしたい
からで、一人も永住の心を持っている
者が無い。ほんの腰掛け同様だから、従
って親切の情を持たぬ。親切のない者
がどうして新領土の民心を収めること
が出来ようか」

後藤 新平(ごとう・しんぺい)

安政4(1857)~昭和4(1929)岩手県生ま
れ。須賀川医学校を出てドイツ留学、明
治25年内務省衛生局長。日清戦争後、帰
還将兵の検疫に活躍し児玉に認められ
る。31年台湾総督府民政長官。39年初代
満鉄総裁。内相、外相、東京市長を歴任、
大正12年山本内閣内相となり関東大震
災直後の東京市復興計画を立案した

児玉は悲惨な少年時代

長州支藩・徳山藩の出身だが、4歳の
時、父親が尊皇攘夷を熱烈に訴えて、
佐幕開国論の藩から蟄居謹慎を命じ
られ、食を断って憤死した。姉に迎え
た婿養子も12歳の時に暗殺された。

明治3年6月、大阪の兵学寮を卒業し
たが、軍曹からのスタートだった。
いきなり少佐の乃木とは雲泥の差だ
が、5年11月には大尉に昇進したあた
り、能力が優れていたからだろう。そ
して児玉の実行力、決断力は「頼るの
は自分だけ」という、少年時代の辛い
体験がバネになったのではないか。

- 31年10月、新設の第11師団長(善壽)に復職
- ▽ 3度目の休職(34年5月)は 馬蹄銀事件が原因

馬蹄銀事件

旅順(ロシア)、青島(ドイツ)、威海衛(イギリス)、広州湾(フランス)と、列強の中国侵略に怒った義和団(社団法人の一派・白蓮教系の秘密結社)が排外運動を起こし、33年6月20日、北京の各国公使館を包囲、攻撃した。

列強8か国は連合軍を編成、日本からも第5師団(広島)のほか第11師団の1個大隊が参加、北京を解放した。その際、日本軍は300万両、10万トンの馬蹄型銀塊を押収したが、高級将校が一部を懐に入れてしまい、兵隊たちが「分け前を寄越せ」と騒ぎ出した。

乃木は大隊長を直接調べて免官処分、上司の連隊長を休職とし、自分も休職を願い出た。この事件は政治問題になり、憲兵が山口素臣第5師団長官舎などを家宅搜索したが、「長州の陸軍」の時代、第5師団関係者はほとんどが長州。刑事訴追は1人もなく連隊長ら2人が停職になっただけ。第11師団には「不名誉な免官処分は自分の所だけ。片手落ちだ」と、不満が残った。

- ▽ 第3軍の第11師団は 乃木子飼いの師団
- ところが「機密日露戦史」には
- 大隊長・志紀守治少佐(のち中將)の「乃木批判」

志紀少佐の言葉(機密日露戦史から)

「第3回総攻撃の前だったが、此度の攻撃で旅順が落ちねば、軍司令官は將に死を決して居るとの風説が伝つたことがある。然しその風説はごうも第一線部隊の督励にも発奮にもならなかったのである。それはご随意にとばかり聞き流しただけである。又將軍の子供2人が戦死した如きも、今日では第一線の士気を鼓舞したように云い伝えているが全く虚偽である。第1師団方面は知らぬ事、第11師団方面は当然位に考えたに過ぎなかった」

- ▽ 田中国重少佐も 前線を視察して 児玉に
- 「軍司令官の威信、地に墮ちたり」と報告
- 犠牲が重なるうち 前線の空気も 荒んでいった

厳しい師団長だった

丸亀連隊の将校が、毎夜遊び回っていると聞くと、善通寺連隊に夜間行軍をさせ、丸亀の兵舎を囲んで午前2時、非常呼集のラッパを吹かせた。兵隊のゲートルのボタンが外れているのを見付け、中隊長がとっさに「バラに引っ掛けて外れた」とかばうと、そのバラはどこにあるかと兵営中を探させる。結局は、嘘を認めた中隊長に始末書を書かせた。

山口 素臣(やまぐち・もとおみ)

弘化3(1846)～明治37(1904) 長州藩出身。陸軍大将。熊本・東京鎮台・近衛師団参謀長を経て、日清戦争で旅団長。義和団事件では第5師団長として出征した

外面と内面

善通寺の人は、乃木が馬で出勤の途中、子供たちがお辞儀をすると、ニコニコ笑って手を上げる乃木を見ている。ところが、家庭では仏頂面。勝典、保典の2人は軍人にする積もりで、一切が軍隊教育。座る時は膝を崩すな、本を読む姿勢から箸の上げ下ろしまで乃木が指図した。庭に立たせて、突然空砲のピストルを撃って肝試しをする。学校から帰ってくると、学校と家との距離を尋ね、答えられないと、「すぐ測って来い」と命ずる。

「乃木將軍妻返しの松」

乃木は単身赴任で、善通寺近くの金倉(こくら)寺の1室を借りていた。静子夫人が訪ねて来たが、「夫の許しもなしに、なぜ来た」と、会おうとしない。

長男の勝典は士官学校に入ったが、性格も大人しく休日に帰宅したまま戻らなかった事があり、静子は「退学させて、別の道を選ばせたらどうか」

- 勝典は第1師団少尉として、一足早く戦地へ
- ▽出征前夜 静子夫人は 団欒の夕食を用意し
乃木に「今晚だけは笑顔を見せて下さい」
- ▽乃木は「笑っちゃいかん、しっかりしろ」
- 夫人を叱り付け しかめっ面で 酒を飲んだ
- ▽勝典は 5月26日 南山(金剛嶺)で戦死した
- 乃木は「三典の棺が揃うまで、葬式は出さぬ」
- ▽夫人は 部屋に閉じ籠もったまま
- 狂おしいほどに 泣き続けたという
- ▽保典は 周りが心配して 旅団長副官
- 比較的安全な 後方勤務につけたが
- 12月1日 二〇三高地の麓で
- 伝令に行く途中 流れ弾に当たり 戦死
- ▽夫人は 戦後の生活を
- 「涙の出るほど、物寂しい境遇でした」

- 悲しみを一切、表に出さなかった乃木は…
- ▽第3軍に従軍した スタンレー・ウォシュバンは
- 「乃木大将と日本人」(題「NOGI」)に
- 「いかに機嫌よく陽気に見えていても、
- 乃木大将は哀れ断腸の人であった」
- ▽乃木は 興安嶺に沈む夕日に
- 勝典 保典の面影を 重ねていたのではないか

山川草木転荒涼	山川草木うたた荒涼
十里風腥新戰場	十里風なまぐさし新戰場
征馬不 _レ 前人不 _レ 語	征馬前(す)まず人語らず
金州城外立 _レ 斜陽 _レ	金州城外 斜陽に立つ

- ▽乃木にとって 山も川も 草も木も
- 天地全て 悲しみの色に 見えたらう

爾靈山陰豈難 _レ 攀	爾靈山陰なれども
男子功名期 _レ 克艱 _レ	あに攀(よ)じ難からんや
鉄血覆 _レ 山山形改	男子の功名艱(か)に
万人齊仰爾靈山	克(か)つを期す
	鉄血山を覆うて山形改まる
	万人齊しく仰ぐ爾靈山

- ▽爾靈山(二〇三嶺)とは 爾の霊 保典の眠る山

と乃木に相談に来たのだ。住職、副官
が取り成し、やっと会ったが、乃木は
極めて冷淡だったという。乃木の「公
私別の厳しさ」を伝える話として、
境内の松の傍に石碑が建てられた。

ウォシュバン(Stanley Washburn)
1878~1950 アメリカ人記者。シカゴ・
ニュースの特派員として旅順攻略戦に
従軍。第一次世界大戦ではロンドン・タ
イムズ特派員としてロシア軍に従軍し
優れた報道で名を馳せた

「乃木大将と日本人」から

この夏(38年)、將軍は快活で、むしろ楽
天的にも見えた。しかし副官たちの語
るところによると、將軍独居の時は非
常に打ち沈んで、令息たちの戦死を悲
しむ痛ましさが見えたという。六月末
の暑気高まったころ、老將軍は從卒に
命じて、營舎の屋上へ梯子を懸け、船底
のついた古い腕椅子を綱で屋根へ引き
上げさせた。そして毎日黄昏時になる
と、そこに上って腰掛けていたのであ
った。此方側の暗いために向うからは
見えないが、向側は表の戸口から通り
を隔ててよく見えた。私は毎夜向側の
屋上に月影を浴びている將軍の、瞑想
の姿を視守るのであった。將軍は大長
靴を脱いで、寸時も肌身離さぬ軍刀を
膝にのせ、遠く興安嶺脈の諸山を望見
しつつ、おもむろに椅子を揺っている。
いかに機嫌よく陽気に見えていても、
乃木大将は哀れ断腸の人であった。

…… 静子夫人の語る乃木 ……………

ウォシュバンは、ステッセルから贈ら
れた白馬に跨がる乃木の写真を東京の
駐在員に送り、静子夫人に届けさせた。
しばらく見入っていた夫人は、涙を流
し「戦争になってから主人と会うのは、

▽旅順陥落の夜 司令部幕僚が祝杯
いつの間にか 乃木の姿が見えない
副官が 乃木のテントへ 行ってみると
乃木は 薄暗いランプの前に
両手で額を覆い 頬には 涙が見えた

●家庭の安らぎを拒み続けた軍人乃木が、人前で初めて夫人に対する情愛の念

▽凱旋の日 出迎えの 静子夫人の両手を握ると
「只今帰りました」しばらく 手を放さなかった
▽その夜の乃木は 珍しく 乱れた
▽寺内正毅陸相も 駆け付けた祝宴で
宴半ばに 二階の 二児の勉強部屋へ
▽大の字になり 鴨居の 二人の写真を見ていたが
突然「酒だ、酒だ」親戚の子が 持って行くと
「お前も外戚だ」「ここにいる者はみんな
外戚だ、ダメだ」と 怒鳴り
最後は狂ったように「寺内を殴ってこい」
▽乃木は 遺書に「伯爵家を断絶する」
二児を失った悲しみが 殉死の引き金に

●乃木の死はまた、天皇に愛され、信任されたことに

▽天皇の侍従を 武士で固めたのは 西郷隆盛
▽15歳で即位された 明治天皇は
孝明天皇の たった一人の男子 病弱だった
▽維新の風雲を潜り抜けた 硬骨漢ばかり
山岡鉄舟 村田新八 島義勇
▽若き天皇に 遠慮会釈なく接し
馬術 武術 酒の相手をして 骨太に教育した
▽女官に囲まれて 育った天皇には 全てが新鮮
中でも 西郷に対する 信任 敬愛の念は絶大

よもの海 みなはらからと思ふ世に
なと 波風の立ちさはくらん

▽明治天皇が「日露開戦の時に」が 定説だが
「西南戦争の時の作だ」という 説がある
▽上野公園の 西郷の銅像は 明治31年
彫刻家 高村光雲(たかむら・こううん)の手で完成
天皇は 建設費用に 金5百円の御下賜金

これが始めてです。主人が出発の別れに、戦争が首尾よく終るまでは、自分のことは死んだと思え、その時までは音信(たより)するな、自分も音信はしない。自分は、生命も時間も考えも、すべて、陛下と国家に捧げているのだから、些(すこ)しの私情もこの間にはいってはならないと申しましたが、その言葉の通りでした。拍車とか、何かの新規の註文を寄越す以外、何の音信もないのです」

寺内 正毅(てらうち・まさたけ)

嘉永5(1852)～大正8(1919) 長州藩出身。陸軍大将・元帥。西南戦争で負傷、軍政面を歩む。明治35年桂内閣陸相。43年朝鮮総督。大正5年首相に就任しシベリア出兵を強行、米騒動で辞職。長男寿一も元帥、太平洋戦争の南方軍総司令官

山岡 鉄舟(やまおか・てつしゅう)

天保7(1836)～明治21(1888) 江戸生まれ。幕府講武所剣術心得を務め、勝海舟の使者として駿府に赴き、西郷・勝会談を周旋、江戸城無血開城の道を開く。明治4年侍従。宮内少輔、元老院議官。16年道場春風館を設け、無刀流を開いて、多くの逸材を養成した

村田 新八(むらた・しんぱち)

天保7(1836)～明治10(1877) 薩摩藩出身。陸軍少将。明治4年宮内大丞となり、岩倉遣外使節団に同行。7年帰国直後に辞職、鹿児島に帰り西南戦争で戦死

島 義勇(しま・よしゆき)

文政5(1822)～明治7(1874) 佐賀藩出身。安政4年蝦夷・樺太を探険し明治2年蝦夷開拓使首席判官。札幌建設に尽力。4年侍従となったが、7年帰郷。江藤新平と佐賀の乱を起こし、捕えられ斬罪

- 天皇の周りに有能な人材は揃っていたが…
- ▽愚直なばかりに 誠実で真面目な 乃木に
西郷 鉄舟に通ずる親しみを感じたのでは
- ▽天皇が統率する 年1度の 陸軍大演習には
乃木は 3度の休職中でも 必ず参加
天皇は「乃木は感心である」

▽35年 九州大演習で
お召列車が 田原坂の近くを 通った時

「乃木に与えよ」
武士(もゝふ)の攻め戦ひし田原坂
松も老木(おき)になりけるかな

- 乃木は明治40年1月、学習院長に
- ▽明治天皇には15人の子 成人は5人
男子は 大正天皇だけ
裕仁親王(聯34年姓 聯天皇)に 大きな期待
- ▽「華族教育の事、全て卿に任す」
剛直な乃木に 皇孫を託したい思い

いさがある人の 教への親として
おほし立てなん 大和撫子

- 死の順番は、逆になった
- ▽乃木は 凱旋報告を終え 御前を下がる時
「ひとえに自分の罪であり、願わくば
死を賜え。割腹してお詫びしたい」
- ▽天皇は「今は死ぬべき時ではない。もし死を
願うなら、自分が世を去ってからにせよ」
- ▽乃木より 3歳年下の天皇は
健康そのもののように見えたが 糖尿病に
嚴重に隠され 天皇も ご存じなかった
- ▽乃木を 労わる積もりの言葉だったが…

- 明治45年は、異常に暑い夏だった
- ▽7月15日 天皇の異常が 傍目にもはっきり
1時間足らずの枢密院会議で 再三 眠り込む
- ▽宮内省は20日「恍惚の状態にて」危篤を発表
- ▽明治天皇は 30日午前零時過ぎ 亡くなられた

…… 学習院での乃木 ……………

好々爺そのものだったという。乃木の教えたかったことは、勤勉、努力、忍耐、質素、真摯…いっぱいあったろうが、わが子の時と違い、言葉で指図せず、ニコニコやって見せた。旅行先では、夜中に生徒の寝室を回り、風邪を引かないか、衛生に気を遣った。

学習院が四谷から目白に移ると、生徒と一緒に寄宿舎生活。その日から酒、煙草をやめている。軍人院長に対する反発はあったが、「おじいさん」と呼んで、敬愛する生徒が多かったという。

—— 「明治の終わり」の衝撃 ——

危篤が発表されてから、国民はひとしく平癒を祈願した。29日には「御昏睡に陥らせ」、「御四肢暗紫色を呈す」ようになった。東京市長は「聖上陛下の御不例に対しては日本臣民は殊に謹慎して差当り火の用心を為し喧嘩口論等を注意せられたきものなり」との談話を発表、やまと新聞は「徹宵二重橋畔に祈る若き女」や「市役所へ天機奉伺の為め雲集せる民草は無慮四千二百人」と伝えている。

天皇崩御に、各新聞は全紙面を黒ワケで囲んで哀悼の意を表した。

—— 乃木の覚悟は、すぐ決まった ——

11歳の裕仁親王に、お別れの挨拶に伺っている。子供心に異常を感じたのか、「院長閣下、あなたは何処かへ行ってしまおうのか」あの甲高い声で尋ねられたのを、女官は耳にしている。

ご大喪まで40日余りあった。書類など身辺を整理する乃木に、夫人はいつ、乃木の決意を感じ取ったのか — 夫人は乃木家の跡目をどうするのか聞いている。乃木が「心配だったら自分と一緒に死んだらよかろう」冗談めかして言う

- 9月13日午後8時、乃木夫妻は自刃した
- ▽天皇の棺が 二重橋を出て 青山斎場に向かい
一斉に 号砲が鳴ったのを合図に
- ▽15分前 夫人は 恩賜の葡萄酒を持って
別れの杯を交わした時に 夫人が「自分も」
- ▽乃木は 軍服姿 軍刀で 十文字腹に切り
服装を整えた後 刃を両手で持ち 頸動脈切断
乃木63歳 静子夫人53歳だった
- ▽乃木の遺書(全10条)は 国民新聞が
赤坂警察署長から聞き出し 号外で特報した

乃木の遺書

第一条 自分此度御跡ヲ追ヒ奉リ自殺候段、恐入候儀、其罪ハ不_レ輕存候。然ル処、明治十年役ニ於テ軍旗ヲ失ヒ、其後死処得度心掛候モ其機ヲ得ズ、皇恩ノ厚ニ浴シ、今日迄過分ノ御優遇ヲ蒙、追々老衰、最早御役ニ立候時モ無_レ余日_一候折柄、此度ノ御大變、何共恐入候次第、茲ニ覚悟相定候事ニ候

- ▽ポイントは「追い追い老衰
もはやお役に立ち候時も余日無く」
- ▽己れを知る者 自分を引立ててくれた
明治天皇に 死を以て 報いる
理由としては 親授された軍旗が
軍人として 一番 ふさわしいと思ったのでは

- 殉死は「明治の終わり」を最も象徴的に示し、反響も様々だった
- ▽森鷗外は 日記に「半信半疑す」
- ▽徳富蘆花は
「息をのんで、眼を数行の記事に走らした。「尤もだ、無理はない、尤もだ」。かく眩きつつ、余は新聞を顔に打ちおおふた」
- ▽志賀直哉は 日記に「馬鹿な奴だという気が、ちょうど下女か何かが無考えに何かした時に感ずる心持ちと同じような感じ方で感じられた」
吉井勇が「近頃不愉快な事でした」の記述も
- ▽新聞論調も 賛否こもごも
「崇高なる人格」と 賛美するもの
「古き時代の遺物」と 否定するもの

と、夫人は「いやですよ。せいぜい長生きして、お芝居を見、美味しいものをどっさり食べたいと考えているいるんですから」夫人は若い頃から芝居好きで戦後は着物道楽に凝っていた。乃木は、黙って許していたという。

乃木の遺書には、夫人宛てのものもあった。一人で行く積もりだったのか、冗談めかした言葉に自分の決意を伝えた積もりだったのか。

乃木の辞世

うつし世を神さりました大君の
みあとしたひて 我はゆくなり

殉死

徳川時代になってもなお、道德視する風潮が残り、幕府は天明2年(1782) 武家諸法度に加え禁止した。

森 鷗外(もり・おうえん)

文久2(1862)～大正11(1922) 島根県生まれ。本名林太郎。陸軍軍医となり明治17年ドイツへ留学。40年陸軍軍医総監。乃木の殉死に触発され、歴史小説「興津弥五右衛門の遺書」「阿部一族」「護持院ヶ原の敵討」「山椒大夫」「高瀬舟」

徳富 蘆花(とくとみ・るか)

明治1(1868)～昭和2(1927) 熊本県生まれ。本名健次郎。蘇峯の弟。明治33年「不如帰(ほととぎす)」で人気作家になる

志賀 直哉(しが・なおや)

明治16(1883)～昭和46(1971) 宮城県生まれ。明治43年雑誌「白樺」を創刊、昭和12年長編「暗夜行路」。24年文化勲章

吉井 勇(よしい・ゆう)

明治19(1886)～昭和35(1960) 東京生まれ。歌人、劇作家、小説家

▽しかし 乃木批判の新聞に 読者の抗議が相次ぎ
桐生悠々は 信濃毎日を去り
谷本富も 京大教授を追われた
▽そして 万朝報が「今日まではすぐれし人と
思ひしに 人と生まれし神にぞありける」
▽乃木は 批判を許さない 大きな存在になった

●乃木の一生は常に耐え、耐えることで美意識を貫く

▽都合のいい部分だけが 強調され
陸軍は 旅順の多大な犠牲をよそに
「陸戦の最後を決めるのは銃剣突撃だ」
▽ステッセルに見せた 武士道の奥床しさは
歌に残っただけで 日本陸軍には 忘れられた
▽乃木は 総攻撃のたびに 憲兵を用意させ
占領後の治安維持 非戦闘員保護に 心を配った
▽前線では 評判が悪かった
「また乃木式が始まった。これから戦おうと云う
のに、戦った後のことを心配している」(越後)

…… 日清戦争で「旅順虐殺事件」 ……

明治27年11月21日、乃木の旅団が旅順攻略の際、ニューヨーク・ワールドは「旅順の日本軍は陥落の翌日から4日間、非戦闘員、婦女子、幼児など約6万人を殺害し、殺戮を逃れた清国人は旅順全市でわずか36人に過ぎない」

これが国際問題になり、治外法権撤廃の日米改正通商条約にも影響が出てきた。英国は7月16日調印、米国も11月22日に調印を終えたが、上院の批准審議に「待った」がかかった。日本では一切報道されず、公刊「日清戦史」にも記録がなく、真相ははっきりしないが、陸奥宗光外相は駐米公使に「旅順口ノ一件ハ風説程ニ誇大ナラスト雖モ多少無益ノ殺戮アリシナラム然レトモ帝国ノ兵士カ他ノ所ニ於テノ挙動ハ到ル処常ニ称赞ヲ博シタリ」と訓令、交渉を急がせた結果、28年3月24日公布となった。

▽乃木は 強い自責の念から
二度と 不祥事を起こさないように したのでは
▽本当は こうした「負の記録」を きちんと残し
乃木の配慮を 教訓に生かすべきだった

新聞の乃木批判

時事新報は「乃木を忠臣だと云って死を賛美する者がいれば大きな心得違いだし、忠義論から云っても、新しい天皇に尽くすべきだ」

信濃毎日主筆桐生悠々は「陋習打破論—乃木將軍の死」を3日間にわたり連載し、「乃木の殉死は、日本人の旧思想、旧倫理をあらわすもので、これは、いわゆる五箇条のご誓文の『旧来の陋習を破り…』の精神に反する行為である。こうした封建思想の遺習を認めるわけにはいかない」と主張した。

また京大教授谷本富は、東京日日新聞への寄稿で、「乃木に銜(けん)気があった事は疑うに余地なく、その古武士的質素純直の性格はいかにも立派なるに拘らず、何となくわざと飾れるように思はれ、心ひそかにこれを快しとせず」

桐生 悠々(きりゅう・ゆうゆう)

明治6(1873)～昭和16(1941) 石川県生まれ。本名政次。明治43年信濃毎日主筆となり、乃木殉死を批判したため大正3年退社。昭和3年に再び主筆に復帰したが、8年「関東防空大演習を嗤ふ」の社説が軍部の圧迫を受け退社。名古屋で「他山の石」を発刊、軍部批判を続けた

谷本 富(たもと・とみ)

慶応3(1867)～昭和21(1946) 香川県生まれ。教育学者。明治39年京大教授となるが、大正2年辞職。以後、在野で大正自由教育理論を推進した

陸奥 宗光(むら・むねみつ)

弘化1(1844)～明治30(1897) 紀州藩出身。駐米公使、農商務相を経て明治25年伊藤内閣外相となり、27年7月英国と条約改正。日清戦争で下関講和会議全権